

制を完全に失うことはなかった」(105 ページ) と評価し、日本のアパレルが進むべき方向性をつぎのように示している。

そんな日本の、ファッションで期待できるエリアはより小さな規模のデザイナーブランドやアーツ&クラフトアトリエの存在。というのも彼らは小さな分量や単一アイテムを地元のクライアント向けに発信することが可能で、今後ユニークな提案が求められる時代のニーズにとっても合っているのだ。彼らの動き、デザイン、クリエイションは専門店を復活させるかもしれないし、デパートでさえ変わるきっかけを与えるかもしれない。デパートはブランド依存から脱却し、エディターのような振る舞いを求められているのだ。(105 ページ)

エデルコートが述べているように服作りを現在のような我々から遠く離れた存在から、より身近なものとする中で、服の価値を取り戻すことも可能となってくるのではなからうか。山縣の蚕の飼育も服作りを原点から見直す契機となり、それは必ず新たなクリエイションへとつながっていくであろう。

コロナ禍は長期化の様相を呈してきており、彼らが指し示す新たなファッションの世界の景色はまだまだ朧気ではあるが、筆者には、それでもその中にファッションの未来と希望があるように感じられる。

<参考文献>

バルト、ロラン 1972『モードの体系——その言語表現による記号学的分析』佐藤信夫訳、みすず書房。
山縣良和・坂部三樹郎 2013『ファッションは魔法』(アイデアインク 09) 朝日出版社。

前田朗編

『美術家・デザイナーになるまで

——いま語られる青春の造形』

彩流社、2019 年刊

368 頁、3300 円+税

国際ファッション専門職大学

河西瑛里子

美術家やデザイナーとはほとんど無縁に過ぎてきた私だが、彼らと交流することがここ数年で急に増えた。ファッション系の大学に就職したということもあるが、2017 年から行っている、日本で魔女を名乗る人々、魔術に携わる人々の中に、踊り、陶芸、アニメーションなど、芸術活動に携わる人々が少なくなかったからである。

その 1 人へのインタビューの中で、印象深かった大学時代の教員として、本書でも取りあげられている、文化人類学者の鍵谷明子の名前が出た。文化人類学的なものの見方やフィールドワークの体験が、創作活動を行う人々に影響を与える可能性があるという点は、文化人類学を専攻する私にとっては興味深い事実だった。毎回ゲストとして招いた教員にインタビューをするという、東京造形大学の授業にもとづく本書を読んでいくと、美術やデザインの領域と文化人類学は、それほど隔たっていないように思えてきた。

第 I 部 デザインを生きる、デザインで生きる

第 1 章 波多野哲郎「文化の境界線上で考える」

第 2 章 薄靖彦「デザインマネジメントの思想をつくる」

第 3 章 益田文和「自分らしく生きるためのデザイン」

第 4 章 春日明夫「創作玩具研究とキッズデザインの世界」

第 II 部 布の世界を旅する

第5章 中野恵美子「大地を織る、世界を織る」

第6章 鍵谷明子「ライジュアの女性文化に魅かれて」

第7章 大橋正芳「テキスタイルが育ててくれた」

第Ⅲ部 美術に出会う、人に出会う

第8章 小川幸造「良いものも悪いものも捨てる（重力への反発）」

第9章 松尾多英「砂の造形美と格闘する」

第10章 母袋俊也「視線の双方向性——見る／見られる絵画へ」

以下ではファッションと関係が深い、第Ⅱ部の3人を取り上げたい。

第5章の中野恵美子は、大学を卒業し、結婚した後に、織物を学ぶため、主婦として大学に入学する。その後、アメリカの大学院に2年間留学し、そのまま夫の転勤についてブラジルのサンパウロに3年間暮らしている。ブラジル滞在中には織機をもっていき、ポルトガル語を習い、材料を揃えに行ったり、現地の織作家と交流したり。アンデスやボリビアの伝統的な織物についても、制作されている現場まで足を運んでいる。

海外での「フィールドワーク」を経た中野とは対照的に、第7章の大橋正芳は島根県出雲市の旧家から見つかった藍染めの資料から、江戸時代の藍板染という染め物の技法を復元する。当時と同様の板を探し求め、人づてに聞いた福島県会津若松市の山の伐採の場面にまで立ち会い、購入する。染める布についても、古来の布の織り手を探し、当時と似

た布を制作してもらう。そうして復元に成功している。

自らも作品づくりをする「フィールドワーカー」の中野や大橋とは異なり、第6章の鍵谷明子は作品づくりに携わることになった、フィールドワーカーである。彼女が長年、調査対象としてきたインドネシアのライジュア島は、各集団が独自のモチーフを持っている。集団ごとに儀礼センターに保管されていた年代ものの布が盗難にあったとき、鍵谷が撮りためた写真のおかげで、布のモチーフが継承されたそう。

読み進めていくと、各教員の活動についての記述に少し物足りなさを覚える。大学設立時の状況の記録というためもあるのか、当時の様子にかなりの紙面が割かれてしまっている（ただし、これはこれで興味深い）。しかし、教員の著者や作品についても紹介されていることから、読了後に読者は、教員の著書や作品を、読んだり見たりすることを勧められているのだろう。

アートと文化人類学の協働については、ティム・インゴルド [2017] や廣田緑・中尾世治 [2021] など、すでに指摘されている。本学ではどのような流れとなっていくのか、楽しみである。

<参考文献>

インゴルド、ティム 2017『メイキング——人類学・考古学・芸術・建築』金子遊・水野友美子・小林耕二訳、左右社。

廣田緑・中尾世治 2021「『作品（アート）⇔研究（人類学）』——トランスフェリムスの実践、あるいは《トライアル 0004》」『FAB』1: 148-174。